

七十二峰庵 大木隨處

写真で探る田園俳句菟

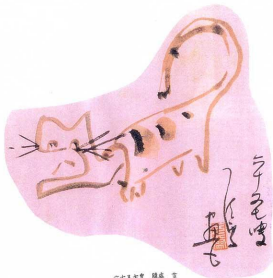
“十七音 心のタネ”



追 録

写真で探る

七十二峰庵大本隨處の句等作品



六十五七度 隨處 宣

七十二峰庵 大木随庵

写真で探る四圍俳句苑

構 成

表紙の挿画は随庵画巻(“遊歴”

序

大木随庵(おおくぎ ずいし)

随庵画のこころ

随庵翁のあれこれ

愛用の七つ道具

サイン

俳画いろいろ

福富録風の“随筆”

写 碑

庵子け

印章あれこれ

「笠井郷土の華」から抜粋

「西遊の写碑」から抜粋

「十訓発句集」から抜粋

「浜松市史・新編史料編」から抜粋

随庵翁の俳句、随筆等作品撰録

俳句・俳画撰録

随筆・雑録／日本放送連動雑誌委員会から抜粋

序

「隨感（大木久市郎）孫の会」の二回目の集いがあった。孫といっても
遠親者であったり、古縁を覚えていたりしている歳になっていた。

孫といっても隨感翁やの俳句等作品は、ほとんど知らなかった。そこで、
足跡をたどり作品を知ろうということになった。

新聞等を通じての呼び掛けによって、集まった句や文庫を写真に撮りまし
た。簡単に集まるものと思っていたのが、消滅した・ほこりかぶりの虫食い
とかで苦労した。

「ほこりたたき」した古文書を精通者にお教えを頂いた。初編は久島 寛
徳（製紙通社）、西原 勲（徳島建設局・建設局）の古文書解説を頂きまとめまし
た。

隨感の句には俳風があり、親しみとユニークさから「こころ」を感じます。
特に、句と俳画を用いて青年や子女の教化に努められたことが納得できます。

隨感句集の初編から日数も過ぎ古文書等が多く集まったので、古文書解説
研究家の鈴木 武雄に解説と監修を頂いて改訂をしました。

多くの方がつまみ食いされることを願っています。

隨感孫の会

傍外主人 河内 進守 拝述

ほこりたたき

俳人大木陸奥翁は、明治後期から大正期そして昭和十数年までに亘り、遠州地方はもとより広く全国に俳句等の作品を残していた。しかし、戦後後80数年が過ぎた今日、句等作品は離散したり、ほこりかぶりになってしまった。

“陸奥翁の会”は、句等作品を少しでも後世に残そうという思いを抱き、中日新聞の報道などで呼び掛けをした。

広く作品探査をするなかで、写真撮影にご協力を頂いた方々に感謝の念をもって、ここにご紹介します。

お陰で、『七十二峰庵大木陸奥 写真で探る田園俳句魂』を編纂することができました。

《協賛作品等のご協力者》

浜松市	笠井新田町	大木 春秋	穂
“	小林	村松 和子	穂
“	笠井町	池田 充隆	穂
“	大瀬町	河内 ひさご	穂
“	笠井町	久島 實	穂
“	上石田町	大塚 千尋	穂
“	藤ヶ原町	鈴木 芳治	穂
“	笠井町	川島慶（株）	穂
“	“	春日神社	穂
“	中田町	寿山堂 大谷洋介	穂
“	助信町	ナガラ（有）	穂
“	御給町	福野 泰弘	穂
岡智部	高町	高山焼窯元 中村陶吉	穂
浜井市	村松	油山寺	穂
磐田市	上野部	青木 美術	穂
“	平松	鈴木 武	穂
静岡県富士市上丹生		岡部 保信	穂
岐阜県土岐市駄知町		昭和製陶	穂
“		以和文所長加藤斗蔵	穂

《参考文献》

- 『十淵発句集』 松島 典平編著
- 『西遊の句魂』 西原 勲 著
- 『笠井郷土の俳』 笠井尋常高等小学校
- 『岡部常信と大日本報徳社』 岡部 保信 著
- 『浜松市史』 新編史料編（三）
- 『日本報徳運動雑誌集』（大日本報徳社会報）
- 『松島十淵古文書解説』 鈴木 武 編

大木陸庵（おおきずいしよ）

大木久市郎（明治5年1月16日～昭和16年4月1日、享年70歳）は、
浜名県笠井町（浜松市笠井新田町）生まれ、通称を“陸庵”と称した。
俳諧宗匠としては松島十洲より『七十二峰庵』を嗣号（贈和号）した高弟で、
また俳諧実践者として地域の俳諧発展に努められた。

俳諧芸術への敬慕の念は、自宅の庭に「子にあくと申す人には花もなし/
芭蕉翁／俳弟子陸庵評」の句碑を立てていたことでも知られています。

俳諧実践指導者としては「朝露の座はいつでも三時超え／陸庵」と句にする
ように、朝早いことで知られ門前に“朝露のある方は午前三時に来られよ”
との一札を掲げていた。

陸庵はく「十七文字」でその意味を述べ感じさせる俳句を通して、子女に文
字を既知し文字を練習させる唯一のものとして教化し精神を向上させた。

また、子女に対する教化として買米、秋納め教えた。

小学校に教鞭を添ること8年、町役場の収入役に8年、町会議員に16年、
学務委員に8年、町農会長に12年等の公事に携わった。



隨處翁のこころ

「十七番 こころのタネ」

大木隨處は、遠江國濱名郡立井町新田（浜松市立井新田町）に住み、一町歩余の田畑を耕作する小農であった。家庭は育ち盛りの子供たちと野良仕事に大忙で、母と妻の汗が日夜流されていた。子供たちは、家事手伝いや雑草の世話を助けた。

翁は、「ほこりたうき」と称して、埃掃りの文献、書物までもむさびり読み、気になることを日記帳雑筆と題して、メモ書きして読学された。

翁は、3時起きをしておの執務と学習をした。地域の若者にも『読學』の学習を奨励し、率先垂範その指導にあたった。

また、若くして「七十二峰隨處」と号し俳諧家区に、軽徳学園の指導に長い間各地を訪れた姿は、松尾芭蕉祖師、二宮尊徳聖人に敬慕の念を抱き、松島十洲俳諧家区に高弟として仕えた。

翁の俳諧家区は兼より軽徳実践指導者、講師、町役場収入役、町会議員等々数多くの公務にあたられ、昭和16年3月に70歳の生涯を終えた。

《七十二峰隨處翁の句から》

ほこりたうき よみてよしあし 脚氣つかば
一寸はがきて 救へたまはれ

ついてはいてよ この提灯（志孝）に
けってて吾等ほ さやせの

我に見つ 心を梅に 餓えけり

是式に 打らかつロウの 勤めかな

朝顔や 湯はいつでも 三時起き

朝の顔に 血をわけながら 秋かな

何よりも 子は實なり 家の春

田圃うた 不二社のげのと あけにけり

はたもけば ふるぎ黄金の 春の雨

随處愛用の七つ道具



硯石と筆の数々



筆のお供に



自作の印類は40余個





「二五嵐」とある十返茶の道具を愛用



随處稿の匂入り便箋



駄知焼（土岐市）の湯呑みに
随處稿の匂
「美味しくお茶が楽しめます」
朝比奈

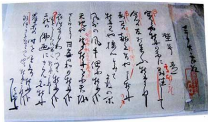


随處のサイン



俳画いろいろ





葛城君に届いた
十割酒政制の手紙

十二月五日 葛城君

拝啓 第一

早くも社内の電に到着して
お心の慰問も社内を交
渉者の設立もやさしくは
社内長で進心するも年終の
海外の無事安小社内
天地や地の社内を小社内
さく目より目録社内の社内
表はす目録ついで社内
種もさしるに聞く社内
正気の社内にさる社内
貴國の情を望む社内
望はさるきてて貴國の社内

敬啓

第二

早くも社内の電を聞か
社内の慰問も社内を交
渉者の設立もやさしくは
社内長で進心するも年終の
海外の無事安小社内
天地や地の社内を小社内
さく目より目録社内の社内
表はす目録ついで社内
種もさしるに聞く社内
正気の社内にさる社内
貴國の情を望む社内
望はさるきてて貴國の社内

敬啓

敬啓

松島真平編集『十遊発句集』（平成3年10月1日発行）から抜粋

『十遊発句集』『十遊関連年表』に大木陸處の句が数多く掲載されていた。
ここに「大木陸處」に関わる句や記事を抜粋した。

- 明治23年（1890）38311 大木久市郎（清風居陸處）入門す。
明治28年（1895）38 38 大木陸處に「蓮庵處」の号を送る。
明治31年（1898） 静岡新報に陸處、俊山と俳人だ動題新雪の
連歌載る。
 舞舞や舞に雪とは舞よき 陸處
明治32年（1899）11 遠隔美術会創設、会長七十二峰庵十淵、副
会長東竹園陸處、俳誌“乞食袋”を発行す。
明治35年（1902）48258 静岡文学第1号に十淵の監歌吟と俳句が載る
供る神恩も香に匂ふ春 陸處
明治39年（1906）68 大木陸處等発起、十淵後援にて、笠井町
福来寺の境内へ陸處百句塚を建立（俳誌紅梅）
天地の和らぎをこの若處かな 陸處
明治40年（1907）84111 陸處の父、建侯豊國治の晩景を行い、併せて
追悼の歌詠句会を開催す。
 一日の平にはしかず重祭 陸處
11331 笠井製糖社が設立され、社長に大木久市郎
が就任す。
114179 「七十二峰庵」の号を大木陸處に譲り……
114 十淵が陸處に七十二峰庵を譲った旨の案内載る
明治41年（1908）14110 陸處への七十二峰庵贈号と以後大有庵と称す
ること並びに陸處への贈号祝吟の依頼を関係俳
誌に掲載す。
明治43年（1910）2838 電話開通式、報徳会、青年補習夜に出席後、
陸處と連歌を巻く。
 第一にきかん墓の花如何 陸處
 つきぬ跡みに更ける春の夜 十淵
 阿ひ雪へ聴み親しめ御代の春 陸處
64158 昆虫世界（名和昆虫研究所、創刊）第14巻
154号に陸處が選をした昆虫の俳句が載る。
 創立15周年の記念を祝して
 この節を昇かぬはなし虫の巻 陸處

- 大正 3年(1914) 48 西園会比羅宮奉願句の選者として
修養が第一種なり年の朝 隨處
- 大正 4年(1915) 111231 大日本報徳学友会報第14年第11号に十淵
と隨處の歌仙載る。
奉祝
御即位今日は期り日は舞きて 十淵
万歳祝ふ眞竹の春 隨處
色かへぬ常盤の松の爽やかに 十淵
- 大正 5年(1916) 7143 駿遠日報と浜松新聞に
水蓮の母もいままん扇映鬼種 隨處
- 大正 6年(1917) 51231 大日本報徳学友会報第181号に句載る。
知育徳育体育の春 隨處
- 大正 9年(1920) 21231 大日本報徳学友会報第19巻第2号に俳句載る
太鼓の上にうたふ初輪 隨處
- 大正11年(1922) 51118 報徳の友第240号に隨處の十淵を送る句載る
十淵翁の北國櫻雪を送る
くみかはず新茶を唄の首途かな 隨處
報徳の友第248号に句載る。
とそに隨處と祝ふ大神代 隨處
- 大正12年(1923) 11118 笠井新田 高野山十七夜観音堂内に隨處。春雄
竹石等の手により句碑を建立。除幕式を挙行す。
はたらけばふるぞ黄金の春の雨 隨處
- 大正14年(1925) 41118 報徳第275号に句載る。
咲く花の匂ひは今や世界的 隨處
- 大正15年(1926) 11118 報徳第284号に十淵の龍題の句その他載る
大神代よりをうたふ初輪 隨處
白きもの白魚にしくものなし 隨處
- 昭和13年(1938) 51108 故十淵翁の愛妻さの子刀日に
昔初く内助の徳や栄の春 隨處
- 昭和16年(1941) 41118 七十二歳隨處(大木久市郎) 死す。70歳
笠井新田 法光院に大木隨處の句碑建つ。
昭和30年(1955) みじか夜そ飯のうき世そ夢の世そ 隨處

